

出品目録

No.	資料名	員数	年代	所蔵	備考
はじめに					
1	勝海舟筆「全吾真」の書および松平春嶽添書の扁額	1額	明治13年(1880)4月3日	当館蔵	
2	勝海舟編『海軍歴史』(松平春嶽献呈本)	9冊	明治22年(1889)刊	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
3	松平春嶽宛勝海舟書簡	1巻	明治22年(1889)11月9日	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
第1章 海軍草創					
4	Slag bij Solebay, 1672 (ソールベイの海戦、1672年)	1枚	1848～55年頃版行	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
5	越前国浦々ノ図	1巻	弘化年間(1844～48)頃	松平文庫(福井県文書館保管)	場面替8/22～
6	早坂文嶺筆「米人渡来之図」	1巻	嘉永7年(1854)8月	個人蔵(当館寄託)	場面替8/22～
7	筒形遠眼鏡(松平春嶽所用)	2点	江戸時代後期(19世紀)以降	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
8	合同舶入相秘記	6冊	嘉永7年(1854)	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
9	橋本左内宛長谷部甚平書簡	1巻	安政5年(1858)4月12日	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
10-1	洋式帆船一番丸関連史料(カッター船図)	1枚	幕末期(19世紀後半)	松平文庫(福井県文書館保管)	
10-2	洋式帆船一番丸関連史料(部品図綴)	1冊	幕末期(19世紀後半)	松平文庫(福井県文書館保管)	
11	昇平丸御軍艦	2枚	幕末期(19世紀後半)	松平文庫(福井県文書館保管)	
12	旅泊のすさみ	1冊	安政6年(1859)	松平文庫(福井県文書館保管)	
13	君沢型御船	1枚	幕末期(19世紀後半)	松平文庫(福井県文書館保管)	
14	『颶風新話』	2冊	安政4年(1857)6月刊	当館蔵	
15	岡不崩筆「大野丸図」	1面	大正10年(1921)	柳廼社蔵(大野市歴史博物館寄託)	
16	箱館図	1枚	大正10年(1921)6月17日写	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
第2章 海軍興起					
17	橋本左内宛三岡八郎書簡	1通	安政4年(1857)10月23日	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
18	松平茂昭宛松平春嶽書簡	1巻	万延元年(1860)5月16日	越葵文庫(当館保管)	
19	View toward Goat Island, San Francisco (Carleton Watkins撮影)	1枚	1865～69年頃撮影	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
20	国是七条草案(複製)	1巻	文久2年(1862)7月起草	原本:熊本市(横井小楠記念館)蔵 複製:当館蔵	
21	松平茂昭宛松平春嶽書簡	1巻	文久2年(1862)閏8月7日	越葵文庫(当館保管)	
22	家譜 茂昭(蒸気船黒龍丸の取得)	1冊	文久3年(1863)5月29日条	越葵文庫(当館保管)	
23	松平春嶽筆「観海日志」(草稿)	1冊	慶応元年(1865)8月	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
24	クロノメーター(松平春嶽所用)	2点	江戸時代後期(19世紀)以降	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
25	アネロイド気圧計(大野規周作、松平春嶽所用)	1点	明治5年(1872)春	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
26	角度計(大野規周作、松平春嶽所用)	1点	江戸時代後期(19世紀)以降	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
27	方位測定儀(松平春嶽所用)	1点	江戸時代後期(19世紀)以降	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
28	松平信義・水野忠精・板倉勝勝・井上正直宛小笠原長行書簡写	1巻	文久2年(1862)12月24日	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
29	横井小楠宛大久保忠寛書簡	1通	文久3年(1863)4月6日	当館蔵	
30	村田氏寿宛坂本龍馬書簡(複製)	1通	文久3年(1863)7月8日	当館蔵	
31	松平茂昭宛松平春嶽書簡	1巻	文久3年(1863)11月4日	越葵文庫(当館保管)	
32	松平春嶽宛勝海舟書簡	1巻	元治元年(1864)2月6日	当館蔵	
33	勝海舟宛松平茂昭書簡	1巻	元治元年(1864)9月9日	越葵文庫(当館保管)	
34	松平茂昭宛勝海舟書簡	1巻	元治元年(1864)9月12日	越葵文庫(当館保管)	
35	荻野小四郎宛勝海舟書簡	1通	慶応2年(1866)4月29日	当館蔵	初公開
36-1	登坂心覚 一(勝海舟を海軍総督に)	1冊	慶応2年(1866)6月4日条	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
36-2	登坂心覚 二(将軍家茂の遺骸を軍艦で東送)	1冊	慶応2年(1866)7月27日条	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
36-3	登坂心覚 三(小倉口の戦況)	1冊	慶応2年(1866)8月11日条	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
36-4	登坂心覚 四(長州藩蒸気船の敦賀来航の風説)	1冊	慶応2年(1866)8月18日条	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
37	松平春嶽宛勝海舟書簡(写)	1通	慶応2年(1866)10月2日	当館蔵	
38	勝海舟意見書	1巻	慶応4年(1868)1月	越葵文庫(当館保管)	
39	松平茂昭宛松平春嶽書簡	1巻	慶応4年(1868)3月21日	越葵文庫(当館保管)	
40	勝海舟筆「破曉入崔巍」の漢詩	1冊	慶応2年(1866)晩秋	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
41	勝海舟筆「大船のたゆたふ」の和歌賛・碇の図幅	1幅	慶応2年(1866)1月4日以前	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
42	勝海舟筆「戊辰晩春東台懷詠」の書幅	1幅	慶応4年(1868)晩春	個人蔵(当館寄託)	
第3章 両雄余影					
43	松平春嶽自筆日記「礫川文藻」(『亡友帖』の献呈)	1冊	明治11年(1878)4月14日条	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
44	勝海舟編『亡友帖』	1冊	明治11年(1878)刊	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
45	武田正規宛勝海舟書簡	1通	明治19年(1886)10月3日	越葵文庫(当館保管)	初公開
46	酬恩義会要旨并仮規則	1冊	明治19年(1886)	越葵文庫(当館保管)	
47	勝海舟筆「吉宗公御教訓書」の巻軸	1巻	明治19年(1886)11月	越葵文庫(当館保管)	
48	勝海舟筆和歌幅	1幅	明治20年(1887)10月晦日	福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)	
49	松平春嶽追悼の和歌短冊	1冊	明治23年(1890)	越葵文庫(当館保管)	

次回展示予告

秋季特別展 能と狂言～桃山の遺風～

令和7年10月11日（土）～11月24日（月・休）



福井市立郷土歴史博物館

FUKUI City History Museum

展示解説シート No.179

令和7年夏季特別展

松平春嶽と勝海舟

はじめに

本展は、幕末期において「四賢侯」に数えられる16代福井藩主松平春嶽(1828～90)と、同じく「三舟」の一人として名高い幕臣勝海舟(1823～99)に注目し、両名の活動や交流を福井に遺る資料を中心に紹介する。また、両名にとって共通のキーワードとなる「海軍」を視点に、両名の事績や交流を描き出そうと試みた。

嘉永6年(1853)のペリー来航を機に、日本国内では欧米諸国に対抗できる「海軍」の建設が政治的な課題となった。当初の海軍建設は西洋式帆船の導入・運用から出発し、蘭学を介した技術の受容が急速に進んだ。その過程で、海軍を軍勢力と海運の両面から活用する富国強兵論が立ち上がっていくことになる。

幕府・諸藩の「海軍」整備が進む文久期になると、幕府や諸藩が分有する海上軍勢力を統合し、日本全国の防衛を担う国家的な海軍の創出が目指された。勝海舟は、幕府・諸藩が海軍建設のため資金を出し合い、優秀な人材を海軍に結集させる「一大共有之海局」構想を打ち出している。この構想は、文久2年(1862)から幕府の政事総裁職に就いた松平春嶽の容れるところとなり、文久の幕政改革でその実現が目指された。海舟の構想は、春嶽を筆頭とする公議政体派との親和性が強く、海軍建設は幕末政局と密接に関連しながら展開していくことになる。

海軍の創設が当時の政治・社会に大きな影響を与え、明治維新という変革を加速させていくさまを、本展から感じ取っていただければ幸いである。



松平春嶽(青年期、福井市春嶽公記念文庫)



勝海舟(1860年撮影の複写)
大田区立勝海舟記念館提供



勝海舟筆「全吾真」の書および松平春嶽添書の扁額(明治13年4月3日、当館蔵)

第1章 海軍草創

飢饉や異国船の出没で社会不安が高まっていた江戸時代後期、幕府・諸藩では逼迫した財政を立て直し、国内外の有事に対応できる軍事力を確立するため、さまざまな改革に取り組んだ。天保9年(1838)に16代藩主松平春嶽(慶永)を迎えた福井藩は、儉約と綱紀肅正による財政基盤の建て直しに取り組む。また、春嶽は海防体制の整備を強く唱えていた水戸藩主徳川斉昭なりあきの影響を受け、西洋科学技術の導入による軍事改革を進めていった。安政期からは橋本左内や佐々木権六など蘭学に造詣の深い藩士を積極的に登用し、安政6年(1859)には本格的な西洋式帆船「一番丸」が竣工して、下関や長崎への航海に運用された。さらに、同時期に大野藩は西洋式帆船「大野丸」を取得し、蝦夷地との交易で運用した。安政期の越前地域において、西洋式帆船は藩の経済活動を支える重要なツールとして注目されていたのである。

本章では、福井藩・大野藩の事例を通じ、軍事力と海運の両立という幕末期海軍の特質が現れていく過程を紹介する。



岡不崩筆「大野丸図」(柳廼社蔵、大野市歴史博物館寄託)



勝海舟(明治13年8月16日撮影)
(福井市春嶽公記念文庫)

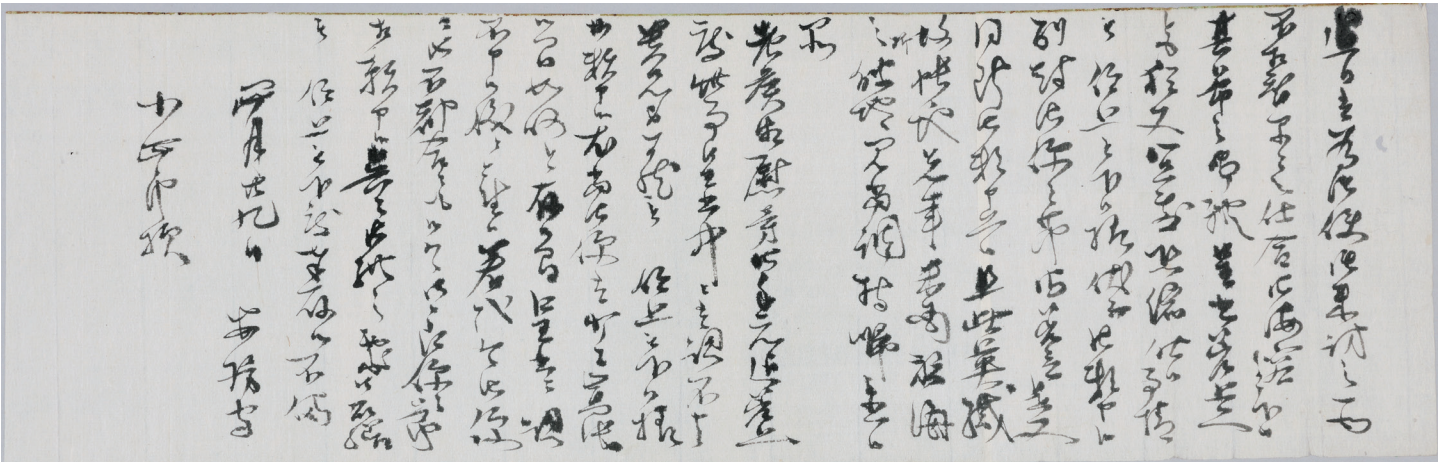


松平春嶽(晩年期、福井市春嶽公記念文庫)

第2章 海軍興起

文久2年(1862)、松平春嶽は幕府の政事総裁職に就任し、公武合体と公議輿論よろんを重視した幕政改革を主導することになる。その改革に幕臣の立場から協力したのが、勝海舟(麟太郎)だった。海舟は、平時に輸送船に限らず軍艦も海運業に用いてその利潤を海軍費に充て、有事の際は海上軍事力として敵と対峙する、という海軍と海運を一致させた運用を構想し、これは松平春嶽の政治顧問・横井小楠の考えと方向性を同じくしていた。春嶽からの信頼を受けた海舟は幕府の軍艦奉行並に就任し、幕府や諸藩の垣根を越えた海軍「一大共有之海局」を作り上げることを構想する。その構想から生まれたのが神戸海軍操練所であり、福井藩もその設立と運営を援助した。

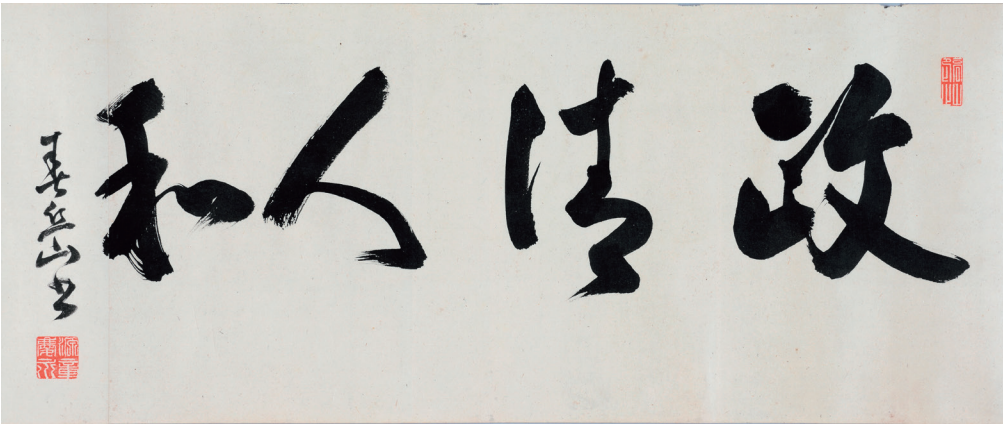
本章では、松平春嶽と勝海舟の協力関係に焦点を当て、彼らの海軍論が挙国一致と富国强兵という当時の政治課題を解決するための重要なファクターであったことを紹介する。



慶応2年(1866)4月29日付荻野小四郎宛勝海舟書簡(当館蔵)

第3章 両雄余影

慶応4年(1868)、松平春嶽や勝海舟らの運動により江戸城の明け渡しが実現し、新政府と旧幕府との全面的な軍事衝突は避けられた。その後、春嶽と海舟はともに新政府の要職を歴任するが、春嶽は明治3年(1870)に、海舟は明治8年に職を辞している。下野した後の春嶽と海舟は、家名断絶を免れた徳川宗家の維持や、旧幕臣たちの救済に力を尽くした。さらに、越前松平家は明治17年、勝家は明治20年に伯爵を受爵し(越前松平家は明治21年に侯爵しうしやくへ陞爵)、春嶽と海舟は華族社会の重鎮として社会的な影響力を保持し続けた。春嶽と海舟の交流は明治期も続き、両者が書き続けた日記からその様子を知ることができる。また、両者は文人墨客として数多くの書や詩歌を遺した。中には、当時の政治情勢に対する鋭い批評も含まれており、両者が明治期の政治や社会の変化に対して関心を保ち続けていたことがうかがえる。



「吉宗公御教訓書」の巻軸(巻頭の春嶽揮毫部分)(越葵文庫、当館保管)